

# 能装束小袖物の用途別にみる寸法と着装との関係

A study on the Measurements and Dressing according to use of Kosode-style Noh Costumes

田中淑江

Yoshie TANAKA

## 1. はじめに

能楽は 14 世紀後半に大成した 600 年の歴史を誇る日本の伝統芸能である。2001 年にユネスコの「世界無形遺産」として認められ、その芸術性は高く評価されている。そこで舞台衣装として用いられる能装束は、高度な染織技術を駆使して制作されており、日本の代表的な染織文化財である。

従来の能装束の研究は、染織技法、意匠に関するものが主流であった。しかし、近年になり能装束の形状および寸法に関する研究にも着目されるようになってきた。

本研究では筆者の継続研究である、能装束小袖物の形状及び寸法の変化について更に詳細な分析を行う。能装束小袖物とは様々な能装束がある中で小袖の形状をしている装束を、形状の上で分類した際の名称である。この小袖物には唐織、厚板、摺箔、縫箔などがあり、これらを着装の用途別で分類すると「表着類」（洋服でいえばジャケット的役割）、また「着付類（下着）」（洋服でいえばシャツ、ブラウスの役割）としてそれぞれ用途により着装の区別がされる。能装束の分類については後述する。

筆者の従来の拙稿では、能装束小袖物を一括して分析を行ってきた<sup>1)</sup>。今回は、能装束小袖物を着装上の分類により更に詳細な分析を行

い、時代は江戸時代後期から幕末期の作品を取り上げる。この時代は、能装束小袖物にとってベルエポックともいえる、着装方法の変化、及び寸法が著しく変化する時期である。着装方法では、それまでのゆったりとした小袖の着装姿から、おはしより<sup>2)</sup>を整え、体に添わせる着装へと変化した。それに伴い、幅広く仕立てられていた身幅、対丈の身丈、袖幅は肩幅より狭い形状が、この時期を境に、前幅が狭く、身丈が長く、袖幅が肩幅より広くなり、現代の着物と類似の形状へと変化する時代である。このような過渡期において、能装束小袖物を着装の用途別の分類で詳細に分析することで、それぞれの小袖の寸法にはどのような特徴が生じたのか、またそれが着装方法とどのように関連しているのかなどの考察を行う。

## 2. 能装束の分類

能装束の分類方法は主にその形状で分類する場合と、着装の用途別で分類する場合がある。

形状で分類すると、袖口が縫いふさいでなく広く開いた状態の「大袖物」と袖口まで縫い詰めた「小袖物」、「袴」「その他」に分けられる。「大袖物」には狩衣・法被・佃次・長絹・舞衣・水衣・直垂・素襖などがある。「小袖物」には唐織・厚板・縫箔・摺箔・熨斗目などある。「袴類」には大口・半切り・指貫などがあり、「そ



図 1 能装束の形状分類

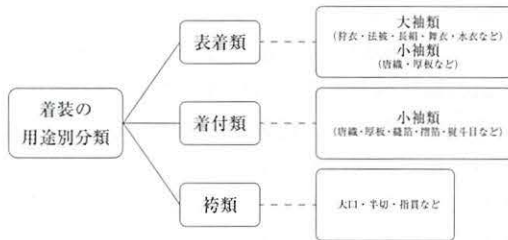


図 2 着装の用途別分類

の他」には腰帯・鬘帯などの帯類と、頭巾などに分類できる (図 1)。

また、能装束を着装の用途別に分類すると、「表着類」「着付類」「袴類」となる。一番上に着用する装束を「表着類」といい、「表着類」の下に着用する装束を「着付類」とする。「表着類」には前述の「大袖物」と「小袖物」の唐織・厚板などが主に用いられる。また「着付類」には唐織・厚板・縫箔・摺箔・鬘斗目・格子などの「小袖物」が用いられる (図 2)。

次に本研究の調査対象である「小袖物」について説明する (図 3)。

「唐織」はほとんどの場合女役の表着として用いられる、絢爛豪華な装束である。

「厚板」は主に男役または荒神鬼畜の装束として、法被や長絹・水衣・側次などの下に着用する着付けとして用いられるので、意匠は力強く、明快で大胆なものがみられる。女役で用いられる場合は老年の身分の高くない役柄の表着として用いられる。

「縫箔」は主に女役の腰巻という着方に用いられる華麗な装束である。また縫箔は女役だけでなく、華麗な役柄である平家の公達や童子、殿上人などの着付けとしても用いられる。刺繍と箔が用いられる美しい装束である。

「摺箔」は女役専用の着付けで、金銀箔が用いられる装束である。

「その他」は本研究では所蔵先で着付として分類されていた様々な小袖を便宜上、その他としてまとめた。「鬘斗目」「格子」「描絵」「縹珍」「錦織」「型染」など。

以上が「小袖物」の分類と特徴である。



図3 小袖物の種類

### 3. 資料について

#### 3-1 調査方法

筆者は現在まで、博物館、美術館、研究機関に所蔵されている桃山時代（17世紀）から現在（21世紀）までに製作された約270領の能装束小袖物を調査してきた。調査内容は能装束を仕立てに必要な16箇所を計測（図4）、仕立替の有無、裏地、伝来、作品の特徴、損傷状態などである。

#### 3-2 資料の概要

調査により作品の中には仕立替があり、制作当初の形状、寸法を維持していないものが含まれることが分かった。分析するうえで、これらの作品は分析対象外とし、仕立替の無い作品166領を分析対象とした。さらにこの仕立替の無い作品の中から江戸時代後期（18世紀後半から19世紀前半）と江戸時代幕末期（19世紀中頃）の作品を選択し、86領を今回の分析対象とした（表1）。この中には年紀が明らかな前田家、池田家伝来の作品27領を含んでいる。

### 4. 資料分析結果

江戸時代後期、江戸時代幕末期の小袖物86領を唐織、厚板、縫箔、摺箔、その他（着付けとして所蔵先で分類された小袖。熨斗目・格子・描絵の小袖など）に分類し、それぞれの項目で「平均値」、「最頻値」、「最小値」、「最大値」を導き出し検討する。なお、数量の少ない項目については平均値のみ記載し、数値が算出できない項目は「-」とした（表2）。

#### 4-1 江戸時代後期

小袖物を着装用途別に示した平均値と、小袖物全体の平均値を比較すると（表2-1）、全体の傾向としては、唐織、厚板、縫箔は、全体の平均値に類似した数値を示した。その他（着付け）は半数以上の箇所では平均値より大きい値を示し、摺箔は半数以上の箇所では平均値を下回る数値を示した。

これらの次に小袖物を着装用途別に仕立てに必要な16箇所の寸法平均値の特徴に注目する。まず、全体の平均値と比較すると、差異がみられるのは身丈、身幅（前幅、後幅）、衿下、前

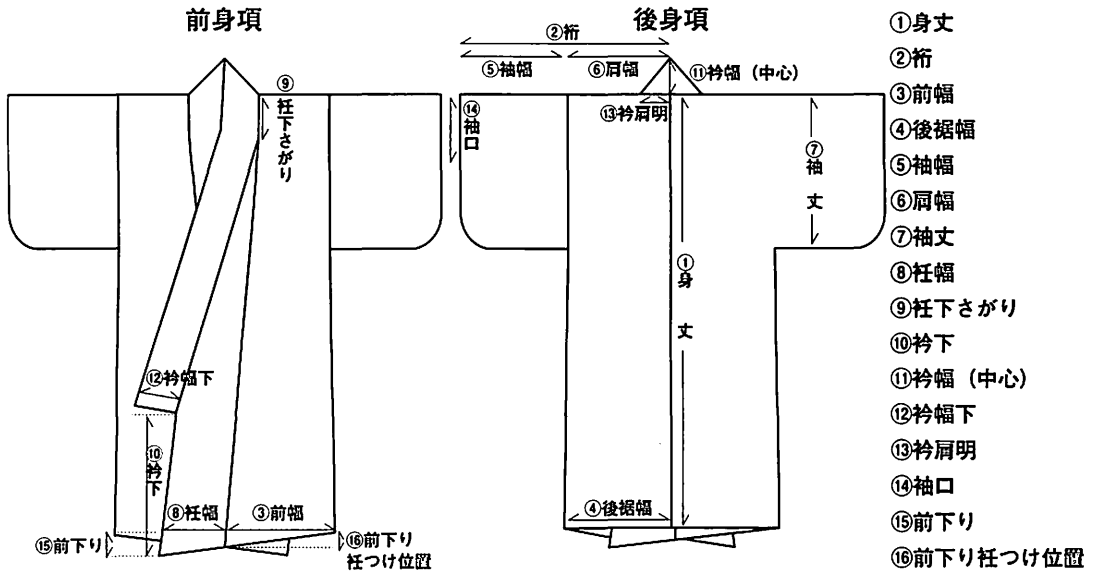


図 4 寸法計測箇所

下がりである。それ以外の各部分はほぼ平均値を示した。

全体の平均値と差異がみられた個所を取り上げる。まず身丈は、全体の平均値 145.7 cm に対して摺箔だけが 143.6 cm と短く、他の小袖物は唐織 145.5 cm、厚板 145.2 cm と平均値に近似値を示し、縫箔 147.1 cm とその他 147.3 cm が多少長い数値を示した。最小値を示した摺箔と、最大値を示したその他では 3.7 cm の差であった。更に身丈との関係で衿下に着目する。現在は身丈とのバランスで衿下寸法は導き出される。身丈が長いと、衿下も長く、身丈が短いと衿下も短くなる。しかし、この時期の衿下寸法には規則性がみられず、ほぼ同じ身丈の唐織 145.5 cm と厚板 145.2 cm に対して衿下は 51.7 cm、46.8 cm と約 5 cm の差がみられる。また、異なる身丈の縫箔 147.1 cm と摺箔 143.6 cm に対して衿下は 53.0 cm、52.9 cm とほぼ同じ数値を示した。

次に身幅は、平均値 35.4 cm (前幅)・36.9 cm (後幅) に対して、唐織 36.4 cm・37.9 cm、厚板

37.3 cm・38.9 cm と大きい値を示し、その他はほぼ平均値の 35.8 cm・36.5 cm であった。平均値より小さい数値を示した縫箔、摺箔は 33.7 cm・35.6 cm であった。小袖物の中で最小値を示した縫箔と摺箔は、最大値を示した厚板より前幅で 3.6 cm、後幅で 3.3 cm 狭い数値を示した。この差を小袖全体の形状で考えると、一身頃、前幅と後幅を合計すると約 7 cm 狭くなり、装束の身幅は二幅から構成されているので 7 cm の 2 倍と考えると全体で 14 cm もの差が生じることになり、縫箔・摺箔の身幅は他の小袖物に比べると狭いことがわかる。

前下がりは、平均値が 7.1 cm に対し厚板が 5.1 cm と短く、その他が 8.3 cm と多少長く、それ以外の小袖物、唐織 7.1 cm、縫箔、摺箔 7.6 cm、とほぼ横並びの数値を示した。

江戸後期における着装の用途別にみる小袖物の寸法の違いは、能装束着装の際、一番上に着装する表着類である唐織が他の小袖に比べて寸法が大きいのではないかと考えたが、その傾向







は身幅に見られたただけであった。また、表着類の下に着用する着付類である、厚板、縫箔、摺箔、その他では、摺箔のみ表着類の唐織より寸法が小さい傾向を示した。全体に、表着類、着付類の区別ができるほどの寸法の特徴はほとんど見られず、唯一身幅（前幅・後幅）のみ縫箔と摺箔の着付類が表着類より狭い傾向を示した。それ以外はそれぞれの箇所寸法にばらつきがあり統一性は見られなかった。

#### 4 - 2 江戸時代幕末期

小袖物を着装用途別に示した平均値と小袖物全体の平均値を比較すると（表 2 - 2）、全体の傾向としては、唐織は平均値より大きい数値を示したが、厚板、その他（着付け）は平均値に近似値を示した。縫箔、摺箔は平均値より小さい数値を示すものがほとんどであった。

次に小袖の着装用途別に仕立てに必要な 16 箇所の寸法平均値の特徴に注目する。まず全体の平均値と比較すると、差異がみられたのは身丈、身幅（前幅・後幅）、袖丈、前下がりである。それ以外の各部分はほぼ平均値を示した。

全体の平均値と差異がみられた箇所を取り上げる。まず身丈は、全体の平均値 149.7 cm に対して縫箔 147.4 cm、摺箔 148.2 cm と短く、唐織 150.7 cm、その他 150.9 cm と平均値に近似値を示し、厚板は 151.4 cm と多少長い数値を示した。最小値を示した縫箔と最大値を示した厚板では 4 cm の差であった。

次に身幅は、平均値 35.0 cm（前幅）・36.4 cm（後幅）に対して、唐織 36.1 cm・37.3 cm、厚板 35.5 cm・37.2 cm、その他 35.9 cm・36.9 cm と多少大きい数値を示した。平均値より小さい数値を示したのは縫箔 33.3 cm・34.9 cm、摺箔 34.1 cm・35.6 cm であった。小袖物の中で最小値を示した縫箔は、最大値を示した唐織より前幅で 2.8 cm、後幅で 2.4 cm 狭い数値を示した。前項と同じ考えで身幅全体を考えると、縫箔は唐織より 10.4 cm 狭いことがわかる。

次に袖丈は平均値 54.8 cm に対し、唐織 56.6

cm と約 2 cm 長く、厚板 55.1 cm、縫箔 54.1 cm、摺箔 54.8 cm と近似値または同じ寸法を示し、その他が 53.3 cm を多少短い数値を示した。

前下がりには平均値 7.3 cm に対し、縫箔 4.3 cm、摺箔 6.8 cm と短く、唐織 8.2 cm、厚板、その他 8.7 cm と長い数値を示した。最小値を示した縫箔と最大値を示した厚板、その他との差は 4.4 cm であった。

なお、前項で不規則な数値を示した衿下の寸法は、幕末期でも、現在のような身丈と衿下の寸法にバランスの統一性がみられない。例えば、身丈が最小値を示す縫箔 147.4 cm と最大値を示す厚板 151.4 cm に対して、衿下 54.7 cm、54.5 cm である。身丈が長いと衿下も長いという法則は成り立っていない。しかし、この時期の衿下寸法は小袖物全体でほぼ近似値の、55 cm 前後の数値を示し、衿下寸法としては規則性がみられるようになった。

着装用途別に見る小袖物による寸法の違いは、表着類の下に着用する着付類である縫箔、摺箔が他の小袖物に比べると全体に数値が小さい傾向を示した。しかし、これら 2 種類の小袖物は、袖口に関しては他の小袖物に比べて大きい数値を示した。これは重ね着の場合、下に着用する衣服の袖口が上に着用する衣服より短いと、袖口から下に着用する衣服がみえる。これをさけるため、上に着用する衣服より、下に着用する装束の袖口寸法も長くなったと考えられる。

また、表着類として一番上に着用する唐織の、数値は大きい傾向を示した。次いで厚板、その他は着付類の装束であるが唐織と近似値を示した。主に唐織の下着として用いる着付類である摺箔や縫箔の数値は小さく、表着類と着付類の重ねて着用した場合、下に着るものの寸法を少なくするという寸法関係が明らかである。厚板、その他は着付類であるが、唐織の下に着用される装束ではなく、表着類である水衣、法被等の大袖物の下に着用されるため、同じ着付類である縫箔、摺箔とは異なる数値を示したと考えら





図5 江戸中期「能之図」国立能楽堂蔵



図7 水衣着流姿  
能・狂言事典より転写

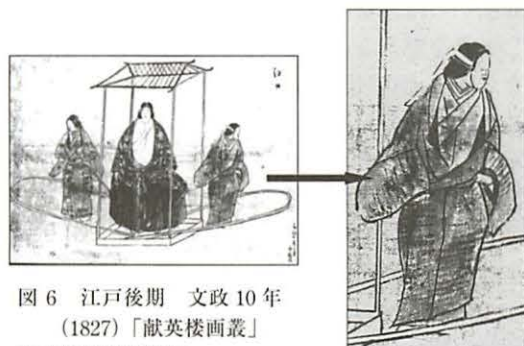


図6 江戸後期 文政10年  
(1827)「猷英楼画叢」  
東京国立博物館蔵  
マイクロフィルムより転写

図6-2 拡大図

明する。前述したが、唐織が小袖物全体で寸法が大きく、次いで厚板、その他、最後に縫箔、摺箔の順で寸法が小さくなる。

特に寸法差が現れた箇所は、身丈、身幅（前幅・後幅）、前下がりである。時代が下ると唐織、厚板、その他の身丈、前下がりは長くなる。身幅は全ての小袖物で前幅が後幅より狭い傾向を示した。

また時代を通して各小袖物の寸法の変化がほとんど生じなかったのは、衿幅、衿下がり、衿肩明である。

れる。

#### 4 - 3 江戸時代後期と幕末期の比較

江戸時代後期の小袖物と、幕末期の小袖物の寸法の傾向を比較すると、江戸時代後期は、まだ小袖物の寸法が明確な標準寸法により確立されていないことが明らかとなった。一方、幕末期の小袖物は着装の用途により寸法にある程度一定の法則が定まってきたことを読み取ることが出来た。表着類の唐織、唐織の下に着付類として用いられることがある縫箔、摺箔、また着付類ではあるが唐織との重ね着をしない、厚板、その他（着付け）との寸法差の現れがそれを証

#### 5. 着装方法と小袖物類の寸法の特徴との関係

前項で江戸時代後期から幕末期へと変化する時期に、能装束小袖物は種類別に特徴ある寸法の変化が生じることが明らかとなった。この寸法の変化と同時期に生じた着装方法の変化と関連して検討を行う。

江戸時代後期から幕末期への移行期は能装束小袖物の着装方法にも大きな変化が生じた時期である。能装束小袖物の着装方法の一つである「着流し姿」に注目する。従来の着装方法は、腰紐などで表着を身体に沿わせることなく、ゆったりと羽おり、裾線は足のつま先が見えるか見えないかくらいの長さで着装していた（図

5)。しかし、江戸後期にはその着装方法に変化が生じた。上半身の表着の衿が外側に折り返され、ゆったりとした着装になった。下半身は腰のあたりに現在でいう「おはしより」が取り入れられると、下半身が体に沿うようになり、前下がりが裾線より上向きになり、足が見えるような着装方法となる(図6)。このことにより、小袖の形状にも変化が生じた。従来は前幅と後幅が同寸でゆったりとしていた身幅は全体に細身になり、前幅が後幅より狭くなる傾向となる。またおはしよりを整えるために、腰紐を用いると、裾が上に上がる。それに伴い身丈や前下がりとは従来より長くなることを拙稿で明らかにした<sup>3)</sup>。

しかし今回は、小袖物それぞれの寸法に着目すると、すべての小袖物が同じ傾向を示してはいない。前述の着装方法の変化は唐織の着流し姿に着目したものである。したがって、唐織が、この変化を境に身丈、前下がりに変化が生じることは明らかである。しかし、同時期に厚板、その他(着付け)にも同様の変化が生じたということは、唐織と同じように着装方法に変化が生じたと考えられる。これら3種類の小袖物は、それぞれが、表着類、着付類として着装に用いられ、着装の用途は異なる。しかし共通点として「着流し姿」に用いられる点が挙げられる。唐織は表着類として、着流しに着装される。厚板、その他は着付類として、表着類(大袖物)の下に着用され、着流しで唐織と同じように着用される場合がある(7図)。

したがって、この「着流し姿」から、おはしよりを整えるという着装の変化に伴い十分な身丈が必要となる。おはしよりを整えるために腰紐を腰に使用すると、裾線と同様に襷先も上に上がる。それを防ぐために前下がりが長くなった。また身幅の減少に関しても、身幅が広いと、重ね着した際、また腰紐を締めた際、足さばきが悪くなる。この3種類の小袖物に関しては、着装方法の変化とともに、それに対応するために寸法の変化は類似の特徴を示した。すなわち

能楽の舞台演出、舞台効果に順応し、着装変化と共に寸法および形状が変化し、この時期に新たな寸法の装束として能装束小袖物が確立したと考えられる。

一方縫箔の身丈は前時代の傾向を維持し、他の小袖物よりも小さい寸法の傾向を示した。また摺箔の身丈は長くはなるものの、他の小袖物より短くなる傾向を示した。前下がりに関しては、2種物の小袖物とも短くなる傾向を示した。

これらの小袖物は単独で着付類として表着類の大袖物との組み合わせの演出もあるが、他の小袖物との重ね着を行う役割もあるためか装束として大きくなる傾向が全体を通して見られなかった。したがって、この2種物の小袖物の寸法からは、着装の変化の影響を受けず、おはしよりを整えることなく、対丈で着装することを意味し、前時代の着装方法が継承されている。これは男性の日常着の形状をそのまま維持し継承したものと考えられる。能楽は男性の芸能であるので、装束の一部に、当時の男性の日常着の着装方法、形状がそのまま継続しているのは当然のことであろう。

また、これらの着装の変化を受けても、江戸時代後期、幕末期を通してほとんど寸法の変化が現れなかった箇所が、「衿幅」「衿肩明」「衿下り」である。これらの寸法は、身幅のゆとり量の維持と衿合わせに関係する箇所である。

「衿幅」の寸法の維持に関係する能の伝書を取りあげる。

「両の膝の間八寸ばかり、可レ然候。あまり、女の前のはだかりたるは、いかゞ敷候」と「八帖花伝書」あり<sup>4)</sup>、また「女房の下に居る胴作り、如レ此。左の手をば立てたる方の膝の内へ入て・・・いかにもく前を狭く、開き候はぬように隙うべし」と「八帖花伝書」<sup>5)</sup>にある。

ここでは男性が演じる女能で座る、蹲うなどの所作があるが、その際に前がはだけることは見苦しい、また前が開かぬようと指摘されている。時代の変化とともにしかし、着装の変化と共に、身幅(前幅・後幅)は狭くなる傾向を

示した。演能の所作をしきたり通りに行うために、衿幅は従来と同様の広い寸法が維持していると考えられることができる。

また、衿合わせに関しては「肌着の練なども深々と引廻し、閉じて首筋より下、肌見すべからず。肌着をわが肌にしなすべし」と『世子六十以降申楽談義』にある<sup>6)</sup>。

これは首筋より下の肌を見せないように着装するには衿元をしっかりと重ねなくてはならないという具体例である。したがって、衿肩明の寸法が狭く、衿下りが少ないということは、衿元が開かないために決められた寸法であることがわかった。

時代と共に変化する箇所もあれば、これら3箇所のように、時代を経ても演能の所作と深く結びつき、伝書に見られる理念を踏襲し変化せず、守られた箇所もあることが示された。

以上のように、江戸時代後期から幕末期における能装束小袖物は、着装方法の変化により2化したことが実物資料の寸法と、絵画資料の検討で明らかとなった。

一方は着装変化に順応して舞台装束としての寸法に発展した小袖物(唐織・厚板・その他)と、他方は部分的にはそれに順応しながらも、従来の着装方法、及び当時の男性の日常着の形態をそのまま維持した小袖物(縫箔・摺箔)である。

#### まとめ

江戸時代能楽は、幕府の式楽として重要な位置にあった芸能である。そのため、幕府の厳しい支配下のもと技芸の練磨と伝統の継承が求められ、徐々に形式化した<sup>7)</sup>。

このように能楽は時代と共に新しく変化することよりも、伝統を継承することに重きを置かれた。その中で舞台装束である能装束小袖物は、時代の流れと共に、着装変化が生じ、同じ小袖物の中でも舞台装束へとさらなる変化を遂げたグループと、男性の日常着の形状を維持したグループとに分化した。また伝統を守るために変えられない寸法も存在し、能装束は伝統の維持

と変化との融合の上に成り立っており、江戸時代後期から幕末期は重要なその確立過程であった。

- 1) 拙稿「能装束の形状変化についての考察 - 小袖物実物資料寸法と絵画資料の比較より」『国際服飾学会誌』No.36, 19 - 36, 2009

拙稿「江戸時代後期 19 世紀における能装束小袖物の法量及び形状の特徴 - 紀年銘のある作品を中心に -」『服飾文化学会誌』vol10, No 1, 37 - 50, 2009

拙稿「能装束の寸法及び形状変遷」『日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科』16, 43 - 54, 2010

拙稿「能装束小袖物の形状変遷に関する研究」『日本女子大学博士学位論文』2010

拙稿「能装束の着装の変化に関する一私見・小袖能装束の寸法の変化から -」『国立能楽堂調査研究』独立行政法人日本芸術文化振興会、Vol. 6, 42 - 61, 2012

- 2) 現在の着付け用語である。身丈(出来上がり寸法)が着丈(着装した時の寸法)より長く仕立てられた長着を着装するとき、腰あたりでたくし揚げた部分をいう。
- 3) 拙稿「能装束小袖物の形状変遷に関する研究」『日本女子大学博士学位論文』2010、80 - 92
- 4) 『八帖花伝書』花伝書五卷中村靖雄校注 林屋辰三郎編『日本思想大系 23 古代中世芸術論』所収、岩波書店、1973、596
- 5) 前掲書 4) 603
- 6) 世阿弥元清『世子六十以後申楽談儀』表章他校注『日本思想大系 24 世阿弥禅竹』所収、岩波書店、1974、295
- 7) 表章他『岩波講座能・狂言 I 能楽の歴史』岩波書店、1987、90 - 150

参考文献

- 西野春雄他編集「能・狂言事典」平凡社、2006
- 観世喜正、正田夏子「一步進めて能観賞 演目別にみる能装束」淡交社、2005
- 北村哲郎「能装束」日本の美術 46 号、至文堂、1970
- 長崎巖「高島屋史料館所蔵能装束について」  
「国立能楽堂 華麗なる能装束高島屋コレクション展図録」独立行政法人日本芸術振興会、2007
- 中村昌三「能のすすめ」玉川大学出版部、1976
- 野上豊一郎「能の話」岩波新書 62、1940
- 武田恒雄、中村保雄「宇和島伊達家伝来能絵鑑百五十番」淡交社、1981
- 「猷英楼画叢」東京国立博物館蔵、享保（1716 - 1736） - 天保（1830 - 1844）
- 国立能楽堂「国立能楽堂収蔵資料図録＜1＞ 文献・絵画Ⅰ」独立行政法人日本芸術振興会、2007
- 国立能楽堂「国立能楽堂収蔵資料図録＜2＞ 文献・絵画Ⅱ」独立行政法人日本芸術振興会、2008